

## 日中青少年友好の夢消えて

神奈川県 吉 瀬 寛

まえがき

私の中国在留は、昭和十七（一九四二）年十月中旬から始まって、昭和二十年七月上旬に勤務先の「大日本帝国大使館在上海事務所」の、土田特命全権公使より与えられた九十日間の一時帰国命令により、山口県仙崎港に上陸した日までの約三カ年である。私はこのように、本国に出張中に終戦を迎えてしまい、再び任地の上海に戻ることができなくなった。その後、昭和二十一年五月三十一日付けをもって、私の正式な職務名であった「大東亜省派遣日語教員」の身分は喪失して、退職となった。そして、海外からの引揚者として、平成九（一九九七）年一月に当時の橋本総理より、「慰籍書状」を交付されたのである。

昭和二十年三月、私の家族（妻、四歳の長女、生後

六カ月の長男）は、大使館の指示により、日本内地と上海との間の最後の連絡船で、上海港から日本内地に向かっているときに、米潜水艦により攻撃を受けたが、間一髪撃沈を免れ九死に一生を得て神戸港に着いた。上陸はしたものの、神戸市街は米軍の爆撃で一面の焦土と化して、妻は幼い子一人を背負い一人の手をひいて途方に暮れるなど、幾多の危機、苦難に見舞われたが、幸いにもそれら乗り越えてきたし、私自身も内地にたどり着くまではそれ相応の苦勞はあったが、私たちのように上海地区からの引揚者は、満州地区から引き揚げてきた方々のあの言語に絶する苦勞に比べれば、災禍の程度、苦勞の深さは、申し訳ないくらい軽いものであったと思う。他地区からの引揚者に対しては言うべき言葉ではないが、私たちは幸運であったというべきであろう。

私の生い立ちと家族

私は、大正三（一九一四）年四月二十日に旧東京府豊多摩郡渋谷町で、父、鋭吉、母、美津の次男として生まれた。現在の東京都渋谷区である。父は、鹿児島

県曾於郡の出身で代々士族の血筋で、私に対しても幼児期からしつけが厳しかった。祖父の種治は西南戦争の生き残りで、示現流剣法に長じていたそうだが、私が四歳の時、渋谷の家で亡くなった。

父は、鹿児島市の郷里で尋常高等小学校の高等科二年を終えると、直ちに郡役所の給仕として働いたが、向学心に燃えていて鹿児島市に出て苦学の末に検定試験に合格し、小学校訓導の資格を取って、鹿児島市内の小学校に教員として勤めた。しかし更に向学心のとどまることなく、旧制第七高等学校の博物科助手として働き、勉強を続けて文部省の検定試験を受け、見事に合格して中等学校の教員資格を取った。その後、いろいろと面倒をみてもらった七高の教授の勧めもあって、明治の末に単身上京し、当時、女子教育の先駆者の下田歌子女史の経営する、私学の実践女子高等学校に教員として勤めた。当時は、女子の学校に独身男性が採用されることは、極めて異例であったが、父は下田校長から特別に信任されていたことだった。ちなみに、私の名前の名付け親は、下田校長であると聞

かされていた。

その後の一時期、早稲田大学、立教高等女学校などにも関係していたことだが、早稲田の場合は海外からの留学生の世話をしていたらしい。私の少年時代は、家の客間には紫檀のテーブルや、七福神の寿老人の稀木の木彫があったが、母の話では台湾の留學生が帰国後出世して、留学時代のお礼に贈ってくれたものということであった。

大正の初め第一次世界大戦後の世界的な不況は日本にも押し寄せて、世間一般の人々は不景気に苦しみ子弟の教育もままならず、義務教育を終えて上級学校に行きたくとも、家の経済状態から、進学を断念して働 きに出る人が増えてきた。父は自分の過去の体験から、これら向学心に燃える子女のために、働きながら学べる夜間の女学校として、文化夜間女学校を昭和十年に芝公園に設立し、下田校長を顧問として迎えた。

日本における夜間女学校の第一号であった。父は、このことを自ら社会事業と明確に位置づけていたが、時勢の要望に応えたこの夜間女学校も、昭和二十年三月

の東京大空襲により灰燼かいじんに帰し、一時閉校の止むなきに至ったが、約二十数年間、勤労女子のために大きな貢献をした。卒業生の中には、国会議員、大学教授、医師など社会の第一線で活躍する多くの人を送り出した。そして、終戦直前に学校経営を長男に託して、郷里鹿兒島に疎開した。

母、美津は、八王子の近郊の旧家の次女として育ち、父と結婚して八人もの子供をもうけたが、男五人には皆大学教育を受けさせ、女三人にも幼児期から自宅に先生を呼んで茶道を習わせ、長女には戦後直ちに大学に進ませた。

こうした家庭に育った私は、昭和二年に地元の駒沢尋常高等小学校を出ると、東京府立第六中学校に進み、在学中はスポーツに励み、特にバレーボールでは東京代表として全国大会にも出ていた。昭和七年、私の好きな古典文学を勉強するため、国学院大学に入学したが、将来は父の経営する夜間女学校を兄と共に継がなければならないと考えていた。

昭和十一年二月二十六日に、いわゆる「二・二六事

件」が起きて、私ども青春期にある者は大きなショックを受けた。殊に決起将校の中に、六中時代の同級生の池田俊彦君がいたことを知ったときには、一層心を激しくゆすられた。大学卒業後は、夜間女学校に国語、漢文科の教師として勤めた。教壇に立ってみると、自分ではよくわかつているつもりでも、これを生徒によく分からせることは、随分と難しいことであると感じたものだった。

私が、社会人として勤めてから一年余りたった昭和十二年七月に、北支で日本軍と中国軍との衝突が起こり、やがて日支事変となり日中戦争へと発展していった。昭和十三年三月一日、私は臨時召集されて、赤坂の近衛歩兵第一連隊に入隊し、十日後には字品から乗船し大連に上陸、以後満州を経由して北京に到着し、郊外の清華大学に本部を置く北支那駐屯歩兵第一連隊に配属された。

北支那の三月はまだ寒く、まして異境の地での星一つの新兵には、目の回るような生活であった。一期の検閲は、徐州作戦参加中に実施されて、ようやく星二

つの一等兵になったが、その直後武漢作戦に参加のため、部隊は北支那から揚子江（長江）を溯行して九江に上陸した。山から山へと戦いながらの移動が続いたが、十月三日の羅盤山の戦鬪で、後頭部に盲管銃創を受けて負傷した。奇跡的に命は取り留めたが、あと一ミリメートル外れたら即死だったと軍医に言われた。それから約一年余りの病院生活が始まった。九江―南京―上海と陸軍病院を移り、昭和十四年二月内地送還となり、大阪―善通寺―松山―道後と陸軍病院を転々とした後、昭和十四年十二月二十五日退院、即除隊となり軍服を背広に着替えて東京に戻った。こうして再び以前の学校に復職することになった。

昭和十五年十二月八日、二十六歳のときに縁あって、見山清子と結婚した。彼女は愛媛の松山市の生まれで、地元の高女を終えた後、東京の親類の家に出てきたが、その家がちょうど私の家の住宅の隣で、出征中の私は知らなかったが、両親は大変に良いお嬢さんだと好感を持って見ていたらしい。松山の実家は、地元で手広く商いをしている、先祖代々土地の代官を務

めていた旧家でもあるということで、お嫁さんにきて欲しいということになった。赤坂乃木神社の神前で挙式した。媒酌人は妻の祖父の弟という人で、本郷区長をしていた。以前は、星享東京市長の下で収入役をしていたという堅い人柄で、教育一筋の父とは、うまが合っていたようだった。

世間は、段々と支那事変の長期化に伴って軍国色が濃くなってきたが、私たちの結婚一周年記念日である昭和十六年十二月八日は、何と日本とアメリカとの戦争勃発の日となった。

さて、ここで兄弟妹のことについて少し触れておきたい。兄は、成種といい明治四十四（一九一）年十月生まれで、私より三歳年長であった。蒲柳（はよ柳）の質で、若いときに数回肋膜炎を患い、医薬に親しんでいたこともあって、おとなしくて私とけんかをしたこともなかった。地理に興味を持ち、大学の夏休みを利用しては、満州まで出掛けて、各地の写真を撮ってきたこともあった。大学を卒業すると、当然のことながら父の

学校に教師として勤めた。昭和十五年十月、私より二カ月早く結婚したが、日本の敗色が濃くなった昭和二十年三月に、海軍に徴収されて横須賀海兵団に入団したが、当然重労働に耐えられる体ではなく間もなく発病し、海軍国府台病院に入院。戦病兵として加療していたが、終戦により病院から復員してきた。終戦時には、両親はじめ家族は鹿児島に疎開していたので、自分の家族を引き連れて鹿児島に帰って来たが、農村のことでもあり食糧その他を近隣の人々の温かい援助を受けて、体調も段々と回復してきた。たまたま新しい学制改革によって新制中学校が設立されて教員に採用され、後に教頭にまでなった。しかし激務から病気が再発して療養所に入ったが、昭和三十四年八月ついに病死してしまった。

次弟の静夫は、四歳年下であるが、私と同じ府立六中に入り、父に似て動・植物に興味を持っていた。大卒卒業後、やはり父の学校の教員となって働いていたが、父の郷里に町立工業学校が開設されるや、町からの要望もあって教員として赴任した。応用化学を担任

したが、独身でもあったので寄宿舎の舎監として少年たちのよき兄貴分として楽しく過ごしていた。召集されて東京の部隊に入営、そのまま満州の佳木斯ヂェムスに送られたが、間もなく負傷して内地送還となって千葉の国府台陸軍病院に転院したが、命に別状が無かったので家族一同は安心していた。その後、退院除隊して結婚し、神戸で妻方の家業を手伝っていたが、我が家の血筋から商売はなかなか向かず、戦後東京に戻り、やはり教師として活躍したが、平成五年八月に病没した。

次々弟の勲も、父の学校の教員になることを目標に教員養成の大学に進んだが、昭和二十年三月前橋の陸軍予備士官学校に行き、復員してすぐに鹿児島に向かい両親と同居した。九月には県立志布志中学校の教科教員として招かれて赴任し、以来教育の現場で長年勤め上げて、現在も意気軒昂たるものがある。

妹三人のうち、一番上の妹も鹿児島女子師範を卒業して教員生活を送った。このように家族のほとんどが、父の後を継いで教育者としての道を歩んだが、決

して父の強要によるものではなく、各人の自由意志で選んだ道であった。

大東亜省派遣教員として上海へ

昭和十七年の夏、たまたま用事で銀座に出掛けた帰途に教寄屋橋を通りかかると、前の方から見覚えのある青年が近づいてきた。先方も気付いたが、それは府立六中時代の友人の森君であった。十年ぶりの再会で、営業を開始したばかりの「ニュートウキュー」というビアホールに入り、生ジョッキでお互いの健在を祝した。健在というよりも存在している、すなわち生きていることを喜びあった。当時は、若い者はほとんど召集されて兵役に服していたからである。私の周りでも、かつて一緒に中国で戦い負傷して帰国し召集解除になった、一流商社員の伊藤君などは、再度召集されて中国大陸に渡ったし、私の卒業した府立六中は、陸士、海兵への合格者が全国でもトップクラスの学校であったので、友人の何人かは、中国大陸の戦場で散っていたことを知っていたからである。

十年間の積もる話の中で、彼は京大で独文学を専攻

して、卒業後は旧制金澤高校で教鞭をとっていたが、我が国の古典芸能に深い関心と造詣をもっていたので、現在は文部省の文化財保護委員会に勤務しているとのことであった。そこで彼は私に、「今、文部省で、興亜院と共同で中国の上海地区内において、中国人の青少年に対し日本語を教える学校をつくることを進めており、その教員を募集しているがどうか？」と話し、「全国各都道府県の推薦により文部省と興亜院で選考するのだが、君は国語を専攻しており、また父君の経営する学校での教員の経験もあるから応募しないか？」と付け加えて、熱心に勧めてくれた。さらに、「もし希望があれば、僕が文部省の内部推薦者として話をすすめる」とも言ってくれた。私は友人のアドバイスに対して、心から感謝しながら聞いていたが、考えてみれば、妻をはじめ両親や兄弟の同意も必要だし、改めて返事をさせてもらうということで、再会を約して別れた。

この思いがけない森君との奇遇が、それからの私の一生の運命を決することになってしまおうとは、夢にも

思わないことだった。私は独りで、どうすべきかを真剣に考え抜いた。かつて一兵士として北支、中支の戦野で銃火を交えた中国の地に、今度は干戈<sup>かんか</sup>を交えることではなく、心と心の交流を基にした日中青少年同士の友情をはぐくみ、そしてお互いの文化を尊重し、正しく認め合うことをなすという重大さに、私の貧弱な教師としての経験を少しでも役に立てようと考え、私は明るい気持ちになり、その堅い決意を両親や妻に話すことが出来た。初め、父は突然の申し出にびっくりした様子だったが、自分の後継者には兄がいたし、また次弟も教壇に立っている現状から、私の決意を快く承諾してくれて、私はまずほっとした。妻は意外にも、私の外地行きには素直に同意してくれた。それからすぐに森君に会いに文部省に行き、上海に行くことを承諾した。いろいろな手続きなどについて詳細に指導を受け、必要な書類を提出した。間もなくして選考のために興亜院に行ったが、その後すぐに採用通知と同時に合宿訓練の案内を受けた。

原宿の東郷神社の境内にある広い会館に、二十数人

の採用者が集まった。聞いてみると、全国各地から集まってきており、東京出身者は私以外わずか数人であった。訓練は、興亜院の大学教授が練成官として泊まり込みで面倒をみてくれた。訓練は約十日間であったが、内容は中国人と一緒にやって中国人の生活に入り込むので、決して支配者的態度をとってはならない。殊に、これから配属される上海地区内の学校（高級中学校、初級中学校、小学校）の生徒は、従来日本人の高圧的な支配態度に対して民族的反感を持っているから、まずそれを解消してから語学の勉強に入るという覚悟が必要ということで、私たちに對する意識改革が中心だった。あとは現地における日常生活上の細かい注意、日本と中国の文化の違いなど、詳細にわたっての具体的な実生活上の注意事項などの指導を受けた。合宿訓練が終わって間もなくの昭和十七年十月九日、いよいよ上海に向かって出航するために長崎に集合し、十日に出港ということになった。

まずは当面の後顧の憂いをなくすために、父母の家の隣にあった我が家を引き払い、妻と生後六カ月に

なった長女を連れて、一応四国の松山にある妻の実家に向かった。上海での生活が落ち着いてから家族を呼ぶ心積もりで、家族を実家に預けて、単身で七日に松山を出発し、九日に長崎に着き、翌十日の午後に長崎港を出航した。

約一昼夜の航海の後に、揚子江に入りしばらく遡江して、黄浦江に入ると間もなく上海港に着いた。かつて三年前に、わたしは白衣の勇士としてここ上海から日本に送り還されたことを思い出して、感無量であった。一行は、出迎えの人に伴われて日本人の居住地区である虹口地区ホンキョウの横浜橋フナバシにある会館に落ち着いた。

いよいよ中国での生活が始まると思うと、皆緊張感に包まれていた。約一週間、上海大使館事務所の笠井文化局文化課長による現地での講習が、朝から晩までびっちり続いた。

その中で今でも特に記憶に残っていることは、彼の有名な「老上海オウシャンハイ」といわれた内山完造氏（孫文や魯迅の面倒をみたといわれる人）が夜間に講話に來られて、「民族が違うと、物の見方が違う」という演題で

感銘深い話をされたことである。中国で有名な「烏竜茶」の産地で、茶葉を摘み取りこれを商人が買い取るときに、茶葉の中に混じっているごみや、茶茎などをつまみ出して、その捨てるごみの量を計ってそれにより賃金を払う。日本ならば、精製した茶葉の量によって賃金を計算するであろうが、中国の場合では賃金を多く欲しければ、ごみを多くつまみ出さなければならぬから、当然にごみ含有の少ない精選された茶葉ができるという、至って平易な例話であったが、私には深い感銘を与えられた。日本と中国では、「物差し」が違うということを、心に据えてかからなければならぬと肝に銘じたものだった。

一週間の現地講習の終わりに、各人の配属先が発表された。私は、私立邁倫中学という学校であった。こゝは、英国系のミッションスクールで、正式名称は Medhurst College の付属中学である。身分上は、一応校長の指揮下に入ることであった。

上海における活動と生活

翌日、配属先の学校に行った。校長以下全教員がそ

ろっていて、そこで挨拶を受けてもらったが、その態度は丁重だったが、迎える視線には何となく冷たいものが感じられた。校長はなかなか立派な人のようで、思慮深そうな紳士であったが、はれ物に触るような感じで迎えていることが分かった。中年のスマートな男の先生が多かったが、皆英米の大学に留学したインテリのようなだった。問題は生徒と仲良くなることだと思ひ、日本語の授業の時間では、なるべく日本から持参した写真や、小中学生向けの絵本や、漫画などを使って興味をひくように教育した。私は中国語を大学時代に二年間勉強したが、華字新聞をテキストにした購読が主体であつて、会話はほとんどできなかった。そこで一策を考え、彼らが小学生時代から英語に習熟していることから、私のつたない英語力で日本語の文法上のことや、てにをはの説明などをしたが、案外とそれが受けて、段々と勉強に興味を示すようになった。私は彼ら中学生の物理、化学の教科書の全文が英語で印刷されているのを見て、がく然とした。小学生用教科書でも、華語と英語が半々ぐらいであつた。

日常生活の方は、一時期虹口地区内に住んでいた、実践女学校に関係のある邦人の家に部屋だけを借り、食事は近くの日本人食堂で済ませていた。ひと月ぐらゐして、楊樹浦地区に、大使館事務所が用意した派遣教員用の住宅に移った。約十数世帯の住宅団地で、中には最初から家族同伴で赴任した人もいたので、皆は大変に喜んでゐた。私も、この住宅が落ち着いていて住みやすいようだったので、早速に妻に連絡して渡航を促した。十二月中旬になって、妻は生後八カ月になった長女を連れて上海にやって来た。乳飲み子を連れての長旅は大変だろうということで、松山から長崎までは義父が同道してくれたそうだ。家族も来て落ち着いて仕事ができるようになり、平和で穏やかな日常生活を送れるようになったし、教師生活も楽しく毎日を過ごした。従来、中国人教師が使っていた日本語教科書を、私もそのまま使っていたが、記述内容には私の目からみてもやはり誤りと思われる箇所があつた。それらをまとめて修正意見をつくり、大使館事務所の上司である文化課長に提出したが、大変に喜ばれた。

後日、事務所に用事で出掛けたところ、伊東さんという文化局長の部屋に呼ばれて褒められた。

その後しばらくして学校の生徒だけでなく、一般の市民にも日本語の勉強をする機会を作ろうということになり、大使館事務所の指導で「上海日語専門学校」という学校を創設した。学校の場所が、ちょうどバンド（海岸通り）で上海の中心地でもあり、中国側の官庁、銀行、商社などの密集する所だったので、それらの勤め人が多くて夜間のみの開講だったが、大盛況であった。戦後の日本で英語スクールが流行したのと同じであろう。私はその三人のマネージャーの一人として指名されたので、昼間の学校勤務のほかに夜の日本語スクールもあり、仕事が倍になり一層多忙となった。しかし当時はまだ二十八、九歳の働き盛りの若さだったので、いくら忙しくても弱音を吐くことはなく、かえってやりがいのある満足感というか、充実した日々を過ごしていた。ときには全上海の日本語大会というのを催したが、私は日本語の上手な女生徒を数人選んで、日本の童謡を習わせて出演させ、好評を博

したこともあった。

そのうちに、上海日語専門学校は生徒増加で、現在のバンドのビルを借りた教室では収容しきれなくなっていた。そこで、新たに共同租界内の西康路一九七号にあった、戦前のアメリカ海兵隊の兵舎を、管理者の軍に大使館事務所から交渉してもらい、そこを借りて移った。広い敷地にある赤レンガ造りのたくさんの建物の中の一棟を、スクールとした。そして私は、三人のマネージャーの中の主任格として、同じ敷地の一角にある、元の将校宿舎の内部を日本家屋のように改装して住むことになった。

旧工部局（英国統治時代からの上海市役所）の職員にも日本語を指導することになり、その仕事も私に頼んで来た。幹部職員であるドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデンなどの出身者で多士済々の約三十人ぐらいが、昼食休憩時間の中の一時間程度を利用して毎日続けていて、これがちょうど一年間続いたが、みんな熱心であった。私が教師の職を辞めて後任にバトンを渡すときには、受講者一同から、各人の署名入り

の感謝状と、皮の札入れを記念品として贈られた。このように、昼夜兼行で三人分ぐらいの仕事で、朝から晩どころではなく夜中までも働いたが、私にはやりがいのある仕事と思っていたので、何ら苦にはならなかった。しかし妻は、当初慣れない異国での生活で、しかも周田はほとんど中国人で、それに少数のヨーロッパ国籍の人々がいるだけで、日々の食糧品の買い物でも、当初は近所の市場に行っても買い方が分からずに苦労していた。しかし、段々と慣れるに従って要領も分かってきて、先方の言い値で買うようなことはしなくなった。上海語のなまりも覚えて中国語で買い物ができるようになり、他の人から買物上手と言われるようになった。

そのころ大使館事務所では、更に日語普及を拡大する方策を私たちに求めてきたので、そこで在上海地区の日語派遣教員（私たちは第二回生であったが、第一回生を合わせると約三十人以上の教員がいたと思う）全員に図り、ウィークリー形式の日語紙を発行することになった。その編集発行の責任メンバー三人の中

に、私も加わるようになった。ちょうど昔、私たちの中学生当時に英語の課外教材として使った、ウィークリー形式のものと同じような、タブロイド版の形で編集した。発刊前の準備は大変で、題名もいろいろと考えたが、私が知っていた鹿児島出身の海軍少将であった前田稔氏が、当時汪兆銘主席の南京政府に顧問として勤務していることを聞いていたので、私は手紙でこの日語紙発刊の趣旨を書いて「日中青少年友好の目的で、我々は日語の普及を図っているが、汪主席にこの日語紙の題字の揮ごうを頼んで欲しい」とお願いしたところ、早速に返事がきた。主席の直筆で、「旬刊日語」と見事な筆跡で書いた色紙と、「将来の発展を祈る」という意味の激励の手紙を頂き一同大喜びで、早速に大車輪での活躍が始まった。旬刊というのは大変な仕事で、日語を華語に、またその反対に華語を日語に書き直す編集の仕事と、印刷、配布という日々の仕事で一日も休めず、息をもつけぬ忙しさで、ついに邁倫中学の教師の仕事は別の人に代わってもらった。

私生活では、朝から夜中の二時ごろまでも働いてい

て、子供の顔を見る時間も無いくらいであったが、まれに月に一度ぐらひは日曜日に休めることがあった。そんなときには数え年三歳になる長女を連れて、フランス租界のジェスフィールド公園に遊びに行くのが、せめてもの家庭サービスであった。妻は、日本人も少ない異境の生活をよく頑張ってくれたが、そのころ妊娠していることが分かり、フランス租界にたまたま日本人の産婆さんがいることを知り、そこにお世話になることになった。昭和十九年九月、長男の武が誕生したが、妻は西康路一带に流行していた「長江赤痢」に冒されてしまい、極度な栄養失調となっていた。そんな体調のときに生まれた武は、体重はわずかに一二〇〇グラムと未熟児並みで、果たして育つだろうかと随分心配したものであった。しかしその後日本に帰ってからは、小学生、中学生と成長するに従って、段々とスポーツにも親しみをもち頭角を現したが、「陸の王者、慶応！」にあこがれて入学、レスリング部に入り、卒業時には塾長から特別表彰を頂くまでに成長した。

さて、上海は世界各国人種の坩堝あつばといわれていたが、アジア、ヨーロッパなどの各人種が住んでいて、当然戦争につきもののスパイもたくさん暗躍していたであろうが、昭和二十年になると、街の中でも「春にはドイツが降伏するであろう、そしてその次は日本だろう」というデマ（当時は私たち日本人はそのように受け取っていた）が飛び交い、上海市内でも時々、テロ事件が発生していた。

抗日ゲリラが便衣姿で、劇場やらデパートで、ときには電車の中でも時限爆弾を仕掛けたりしていた。そういう事件では上海海軍陸戦隊が出動して、非常線を張ったり、ときには市内電車を突然に止めて、たくさん陸戦隊員がいかにめいしい武装姿で、銃剣を突き付けて乗客を降ろし、一人一人を尋問しているところに出会うこともあった。また、新々公司とかロキシ―劇場などで、お客が突然に外に追い出されて、警備の兵隊に周囲を取り巻かれている場面にも遭ったが、それを見ると何か突然に戦場に駆り出された感じになり、羅盤山での戦闘を思い出した。

## 昭和二十年の春

このころになると、中国奥地から飛び立ったアメリカの爆撃機は、日本本土に向かう途中で上海地区周辺の軍施設をはじめとして各所を爆撃し、空襲警報が鳴り渡るようになった。大使館事務所では、大使館関係者の家族はなるべく日本に帰るようという指示を出したので、我が家でも乳幼児を二人も抱えていたので、指示に従うことになり準備を始めた。四年ぶりの帰国であるが、持って帰れる荷物は一個だけというこゝとで、赤ん坊のおむつと、ミルクなどを包むともういっぱいであった。いつ船に乗れるのかは、軍事機密上、直前にならないと連絡しないとのことで、準備だけはしていたが、毎日落ち着かなく過ぎていた。しばらくして、「明日、〇時までには上海港に集合せよ」という連絡を受けて、荷物をもう一度造り直した。

翌日、急いで埠頭に行ったが、確か三月下旬であったと思う。埠頭に着いてふと思ったことは、「これが、親子の最後の別れになるのではなからうか?」という不安の念であったが、そんなことを口に出せる状態で

はなかった。たぐさんの兵隊も乗り込み、次いで一般の乗客が乗船した。船の周囲は警備の兵隊が物々しく見張りをしており、家族でも岸壁には近づけなかった。私は、船中での空腹を満たす足しにと思って、埠頭の売店でお菓子を買って求めて、急ぎ取って返したが、もう船は岸壁を離れて遠ざかりつつあった。妻と二人の子供が、無事に日本に着いてくれるようにと、心の中で必死になって神、仏に祈るばかりであった。

後日、家族と再会したときに妻から聞かされたことだが、妻たちの乗った船は揚子江から東シナ海に入り、朝鮮半島の陸地を横に見ながら日本本土に向かったとのことだった。夜になると陸地の近くまで寄って投錨し、夜が明けると再び航海するという方法で進んで行ったそうだ。帰国船は最初二隻で船団を組み、その前後を日本の軍艦が護衛しながら航行していたが、二日目の夜になると妻たちの乗っていた船だけになり、他の一隻の船も、護衛の軍艦も見えなくなった。どうしたことかと不審に思っていたら、もう一隻の帰

国船は、アメリカの潜水艦によって撃沈されたことを知らされたそうだ。それからは、恐怖感でしばらくの間は頭の中が真っ白になり、果たしてこれから先、無事に日本内地にたどり着くことができるのかどうかと考えると、生きた心地がしなかったそうだ。もし万が一の場合には、この子たちと海の藻屑と消えなければならぬのかと、思わず無邪気にミルクをねたる乳飲み子をぎゅうと抱きしめたとのことだった。潜水艦からの魚雷攻撃を受けたら、絶対に助かる道は無いので、翌日の夕刻に長崎沖まで来たときには、思わず助かったと嬉し涙が流れた。それまで一睡もせずに、子供たちの寝顔を見ながら夜を明かしていたので、ほんと安心して疲れがどっと出てきて睡魔が襲い、内地の山々や、懐かしい日本の家々の屋根を見た喜びが頭の中で錯綜していた。

護衛の軍艦とは長崎沖で別れ、それから単独で内地沿岸を航行して瀬戸内海に入り、神戸港に着岸した。四年前は、長崎港から上海まで二十四時間で着いたが、今回は九三日もかかっていた。しかし、有り難

いことに親子三人無事に、こうして内地の土地を踏むことができたことを感謝した。三ノ宮市街は一面の焼け野原で、家もないので泊まることができずに、やむをえず船中にもう一泊して、翌朝食事もとらずに下船した。焦土と化した市街を三人でさまよっていたら、防空頭巾をかぶった男の人が声を掛けてくれた。後に知ったが稲葉さんという人だった。事情を話すと、この寒空に幼い子を連れてはかわいそうだと同情して、鷹取の自分の家に連れて行ってかれて、その晩は泊めてもらった。翌日、稲葉さんに鷹取から電車で神戸まで連れて行ってもらい、そこから満員電車に乗って尾道駅まで行ったが、折から発令された空襲警報で下車させられ、途方にくれていた。いずれにせよどこか今日の宿をとあちこち探したが、どこも被災者や避難民でいっぱい、断られて呆然としていた。そんなときにおじいさんが声を掛けてくれて、こんな所で野宿をしたら大変だと、近くの旅館にあてて名刺を書いてくれた。「これを見せれば何とかしてくれるはずだ」と言われた。半信半疑で宛先のところを訪ねて行った

ら、何と先ほど断られた旅館で、名刺を見た宿の人は、女中部屋でよければとのことであげてくれ、その晩は親子三人無事に一夜を明かすことができた。

翌朝、尾道の港から船に乗って今治まで行き、そこから予讃線で三津浜の実家にたどり着いた。実家の両親は三人の姿を見てびっくりしたが、途中でのいろいろな見ず知らずの人々に救われたことを話すと、妻の母は「お前には、御大師様がついていて下さったのだ。そのおかげで助かったのだ」と言ったそうだ。引揚げの苦勞について、妻はそんなことを話してくれた。

一方、上海に一人残った私は、相変わらずの激務を過ごしていたが、その激務で体が弱っていたところに、長江赤痢にかかり、上海で唯一の邦人病院であった同仁病院で受診すると、診察した医師は「このままでは脚氣から心臓に転移すると致命傷になる。内地で一、二カ月の療養が必要だ」と診断した。このことを上司の高山課長に相談すると、ちょうどよかった、本

省への連絡事項もあるからと、一時帰国の手続きをとってくれた。六月上旬、「公務のため九十日間の一時帰朝を命ず」という在上海特命全権公使 土田豊という公印の押された辞令を受けて、約三カ月間の留守の業務を同僚に委任した。

当時、上海の陸軍部隊では、毎週木曜日に内地への連絡便を飛ばして、その中の一席は大使館事務所用に提供されていたので、私は部隊に連絡を取って席の確保を図ったが、飛行中止が三週間ぐらい続き、なお目鼻が付いていなかった。やむなく陸路を上海―南京―天津―新義州―京城（ソウル）―釜山、そして内地というコースで行くことに決めた。切符は天津まで求めて、帰任時のための旅費として、横浜正金銀行で邦貨百円を儲備券に代え、六月下旬上海を出発した。南京から津浦線で天津に行き、一泊して翌朝の特急アジア号に乗り、翌々日釜山着。そこで連絡船に乗船するための釜山港に向かい、船舶管理の暁部隊司令部に行ったが、連絡船はいつ入港するか不明ということを聞かされて途方にくれていると、釜山在住の婦人が通

りかかり、連絡船が来るまで自分の家に泊まれと言ってくれ、地獄に仏の思いがして世話になることにした。

数日後、連絡船が入港し乗船することができた。二隻の船は、若い兵隊を多数乗せて真夜中に出港した。

戦前は五、六時間ぐらいで下関に着いた航路を、約一昼夜かかった。幸いに、アメリカの飛行機に爆撃されることもなく、無事に下関付近に着いたが、付近の海域は米軍投下の機雷のため危険とのことで、更に日本海を北上して、山口県の仙崎港に入港した。鉄道駅に行ったが、絶え間のない空襲のために線路も列車も被害損傷を受けてダイヤどおりの運行は無く、いつ到着するか分からないとのことで、ホームで夜を明かした。食事は釜山からほとんど口にせず、わずかに天津で買った中華めんの残りで飢えをしのいだ。内地の窮状、惨状を初めて身をもって体験することになった。

その後、やっと汽車や船を乗り継いで四国に渡ったが、道中で目にするのは爆撃のあとの焦上ばかりだった。妻の実家によりやくたどり着いたが、幸いにも家

族三人、無事であった。妻は、私の顔を見た瞬間、幽霊かと思ったそうだ。しかし、親子四人無事で再会できたことは本当に嬉しいことで、お互いに喜び合った。七月上旬のことで、辞令を受けてからちょうど一カ月たっていた。

#### 戦後の再発足

私は、以上のような状況で、内地に一時帰国中に終戦となり上海に帰任することができなくなったが、家族はもちろん私も手提げカバン一つで着替え程度しか持たず、全く零からの再出発であった。実家も、三家族分の援助救済をいつまでも続けることはできず、私は父の郷里鹿児島に行き、そこで再発足することに決心し、昭和二十年暮れに家族を連れて鹿児島に行ったが、父母も親戚の家の離れを借りており、そこに十数人の他人が押し掛けていて大変だった。翌年四月から町立の青年学校教師となって、校地内の旧兵舎の改造バラック小屋に住むことになった。屋根はトタン板だけで、雨の日はバケツを床に置く始末。食糧は、田舎の農家は自家用しか作物は作らないので、私たちは

イモの葉などを常食とした。

昭和二十二年四月に新自治法が施行されて、町長選挙が行われて青年婦人層の支持で町長に選出された。

人口一万人弱の町であったが、私は戦後復興の基本は教育の振興にあると思い、戦後の六、三制実施の推進を考えていた。町民に直接負担を掛けずに中学校校舎を新築し、それが県を代表する優良施設校の一つとして選ばれて、文部大臣表彰を受けた。昭和二十六年四月に町長改選が行われて再選した。

当時、両親は東京から移住以来七年目になり、農業にも慣れて田舎生活を楽しんでいたが、たまたま父は知人の一人で鹿児島県切つての実業家である岩崎与八郎氏から相談を受けた。それは、優秀な能力を持ちながら、家庭の経済的事情から大学への進学を断念せざるを得ない県の若者に、私財を投じて東京の世田谷に三千坪の土地と寮舎を建て、学生が安心して学べるようにしたいが、その学生寮長として青年たちの面倒を見てほしいということであった。父は快諾して、家族を連れて上京し、鋭意開寮の準備に専念していた

が、昭和二十六年八月、にわかには病のために永眠した。そこで私は町長を辞任して、父の志を継いで寮長となった。今年は寮の創立五十周年を迎えるが、寮出身者は千余人となり、良き社会人として多方面で活躍し、あの敗戦のどん底から立ち直り今日の繁栄をもたらした日本の活力に、いささかなりと貢献したことと  
思う。

私は現在、孫、曾孫を含めて二十人の家族に囲まれて、平穩無事に何一つ不自由なく、この平和な日本で暮らせることを、まず心から感謝したい。今日のこの平和を築くために犠牲となった多くの先人たちに対して、今この平和を堅持するために何をなすべきかを、常に忘れないようにしたいと念じる次第である。